

**[資料] 檜山洋子氏インタビュー
—広島大学初代学長、森戸辰男の子として—**

檜山 洋子

嘉陽 礼文

広島大学平和センター

**[Material] Interview with Ms. Yoko Hiyama for her
Testimony: As the daughter of Tatsuo Morito, the first
president of Hiroshima University**

Yoko HIYAMA

Rebun KAYO

The Center for Peace, Hiroshima University

Abstract

Ms. Yoko Hiyama was born in Nishinomiya City, Hyogo Prefecture, on January 22, 1935. She is the eldest daughter of Tatsuo Morito (1888–1984), the first president of Hiroshima University, and his wife, Kishiko. This testimonial record is composed of episodes from the perspective of Yoko Hiyama, who spent time with Tatsuo Morito's family before the Second World War. The content of the records covers Tatsuo Morito's work, friendship, family and hobbies, with a large proportion of the content related to Hiroshima University. The interviews in this testimonial record are a compilation of questions asked to Ms. Yoko Hiyama by the questioner, Rebun Kayo, on multiple occasions since 2021.

1. はじめに：檜山洋子氏について

檜山洋子（ひやま ようこ）氏は、広島大学の初代学長である森戸辰男（1888-1984）と、その妻である岸子（きしこ）の長女として 1935 年（昭和 10 年）1 月 22 日に兵庫県西宮市に出生された。その後、家族と共に東京へ転居し、井草幼稚園、立教高等女学校附属尋常小学校、同中学校、を経て同高等学校 1 年時に広島へ転居し、広島大学附属高等学校へ編入して同校卒業。婚姻して檜山姓となった。広島市内にて保護司の活動をおこなった。2024 年（令和 6 年）現在、広島市内に在住。

本インタビューは檜山洋子氏が第二次世界大戦以前から森戸辰男の実子として共に過ごした立場から見たエピソードで構成されており、内容は森戸辰男の仕事関係、交友関係、家族関係、趣味関係、等となっている。その中でも広島大学に関係する内容の割合が多い。これまでに発表されている、生前の森戸辰男と共に過ごした経験を持つ人物による講演、インタビュー等としては、森戸辰男が広島大学長に就任する際に同学長秘書に就任した西村博氏の講演（西村 1999）¹がある、西村博氏の講演は、広島大学学長時代の森戸辰男に仕事の面から関わった立場から見たエピソードを中心に構成されている。

一方、本インタビューは、聞き手である嘉陽礼文が 2021 年（令和 3 年）から 16 回にわたって檜山洋子氏に質問した内容をまとめたものである。

2. インタビューについての基本情報

- ・語り手：檜山洋子（森戸辰男と岸子の長女）
- ・聞き手：嘉陽礼文（広島大学平和センター研究員）
- ・趣旨：森戸辰男の思い出について（子の立場から）
- ・インタビュー実施日および内容

2021 年 3 月 9 日（檜山邸にて取材）戦前

2021 年 7 月 14 日（〃）戦中

2022 年 2 月 17 日（〃）戦中

2022 年 7 月 5 日（〃）戦中～戦後、国会議員、交友

2023 年 2 月 10 日（〃）広島大学学長就任、交友

2023 年 8 月 15 日（〃）広島大学学長

2024 年 2 月 9 日（〃）思想、退官、交友

2024 年 3 月 3 日（〃）思想、家庭人

2024 年 1 月 24 日（電話取材）戦前

¹ 詳細は、西村博（1999）、「講演 森戸辰男氏と広島大学」『広島大学史紀要』（1）、27-47、を参照。西村博氏は 2018 年に森戸辰男の墓参に参加された（【写真 3 3】参照）

2024年2月9日（〃）戦前

2024年2月13日（〃）戦中

2024年2月14日（〃）戦後、国会議員

2024年2月20日（〃）広島大学学長

2024年2月27日（〃）思想、退官、交友

2024年3月3日（〃）思想、家庭人

2024年3月5日（〃）広島大学学長、趣味、社会活動

（写真資料についてはインタビュー実施の内容に連動して解説を受けた）

3. インタビュー本文（凡例：本文中の〈〉内の記述は嘉陽によるもの）

【嘉陽】戦前の森戸先生との思い出を御聞かせ頂きたいをお願い申し上げます。

【檜山】東京では西荻窪に住んでおりました、幼稚園時代の思い出は、父が毎朝、私の手を引いて井草幼稚園まで送ってくれたことです。手を引いてと言いましてもね、私は父のオーバーの袖をつかんで歩いていましたが（笑）それだけはよく覚えていますねその頃のことは、父の役目だったみたいですよ、朝に幼稚園へ送るのは。高野岩三郎先生の御自宅が、幼稚園のすぐ近所にありまして、よく父と一緒に邪魔しました、それはもう、週に一度は邪魔していたくらい、しょっちゅうでしたね、高野先生の奥様はドイツ人でいらっしゃって、でも日本語はとても流暢で、お話しして下さる会話のお言葉はすべて日本語でしたね、また外国のいろんなものが高野先生のお宅にはあったものですから、子供心に楽しくて（笑）高野先生のお宅にお邪魔する時には飯盒に白味噌と豆腐のお味噌汁を作ってお持ちしたりしていました、そういうものは母が作って持たせてくれました、我が家からは歩いて30分くらいでしたね、高野先生は温和な、優しいお方でした。それから、我が家の前の道路には、特高警察がいつも立っていて、うちを見張っていたんですけれど、「お変わりないですか？」なんて時々声をかけてくるんですよ、ずっと見ているのですからわかるでしょうに（笑）特高警察の服装は、警察の制服というより私服に近くて、カーキ色のワイシャツのような服装でしたね、彼らは立場上、あまり目立たないような装いでいるものではないでしょうか、私たちは「特高さん」という感じで特になんとも思っておりませんでした。父も、特高警察に対して表情を変えるとかいうことは無かったですね、あちらも仕事でしょうし（笑）特高警察と父が話をしている姿は見たことは無いですね。まあ普段から接しておりましたら、こちらがどういう人間かということは伝わるとおもいますけれど。

【嘉陽】檜山洋子先生は、戦時中に東京から長野県への疎開を御経験なされたとお伺いしました、その頃のことを御聞かせ下さい。

【檜山】小学校の頃に、長野県の別所温泉の鶴屋という旅館に集団疎開をしました、杉並区は別所温泉に割り当てられたみたいですね、引率の先生は稲葉先生という男性の先生とのお母様がお世話係でおられました、女性の先生は近藤先生、武藤先生、がおられました。旅館のお部屋で授業もしましたが、屋外の作業では、生徒皆で炭や粗朶（そだ）を運んだりもしました。それから、寒い時には授業は取りやめて、朝から地下の階にあった温泉に入ることができて、身体を温めることができましたから、ありがたかったですよ、気温が何度以下だったら温泉に入る、ということでしたね、それが何度だったかは忘れてしまいましたけれど、井戸も、飲料水と温泉と、二つありましたね、それから、一般的な疎開の生活と言いますと、よく聞く食糧難のお話がありますけれど、それについては、私はまったく経験していないんですよ、ひもじかったという記憶が無くて、先生方が、生徒何十人分の食料をどうやって確保してきてくれていたのか存じませんが、それは大変だったと思いますよ、食べ盛りの子供達ですからね、本当に、どれほど骨を折られて、御苦労をなされて、生徒たちのために食料を調達して下さっていたのか、あの時代にですからね、日本中どこもかしこも食料不足の中で、頭が下がりますよ、今をもって、私は集団疎開の生活はとても楽しかったです。また、生徒の親が何か荷物でも送ってくるようなことがあれば、その荷物はまず先生が開封するんですね、そうして、中に食料なんかが入っていないかを点検するわけですよ、このことは、疎開する事前の際に、はっきりと保護者には明言されていましたね。だいたい、親というものは、当然、我が子は可愛いわけですよ、それで疎開先の子供も宛てに荷物を送る時には、衣類なんかの中に、そっとお菓子とか、甘いものを忍ばせたりするわけですよ（笑）でも疎開先では、先生はそれを直接に生徒には渡さずに、まず先生が中身を確認してから、それを生徒に平等に分けて配るという配慮を、先生方はされていましたね、お菓子でも、誰は貰って誰は貰えていない、ということが無いように、生徒同士のいさかいが無いように、気を配っておられたのだと思いますよ、本当に、稲葉先生はじめ引率の先生方のそうした教育者とされての配慮といいますか、凄かったなと思うんですよ。そうこうしているうちに、父が東京から私を迎えに来たんですよ、私は別所温泉の疎開の生活が楽しかったから、「なんで戻るの？」と訊いたのですが、父は「お金が続かなくなった」と言っていました（笑）疎開先に仕送りをしていたんでしょうね、子供はそんなことは知りませんからね、そうして、鶴屋の旅館の私の荷物を行李に手早くまとめて、父は、そういう荷造りとかはとても上手な人で人でしたので、私の行李と、それから父が持ってきた黒いトランク、それは父がドイツに留学していた時に使用していたものですが、それらに荷物をまとめて、次には東京から栃木県の真岡（もうか・現在の真岡市）というところに、縁故疎開に行きました、その頃の真岡の生活用品で使っておりましたふくべ細工の、炭入れを最近まで持っておりました。

【嘉陽】栃木県の縁故疎開の頃のことを御聞かせ下さい。

【檜山】真岡の疎開の頃には、私は当時3歳の弟（森戸 泰（やすし））を学校に連れて行って

いましたよ、母は身体があまり強い方ではなかったですので、小学校も、そのあたりは今と違ってゆるかったんでしょうね（笑）また、父の、上の姉（森戸セイ）も、私たちの住まいの近所に住んでおりました。その姉は東京でお茶の先生をしておりました。東京では千住の方に住んでおりましたので「千住のおばさん」と呼んでおりました。父にはもう一人、下の姉がおまして、ショウという名前でしたけれど、とても優しい伯母でしたね、ショウさんは真岡には来ていなかったですね、戦後のことですが、その息子さんが松也（まつや）さんというんですが、私の従兄弟にあたる方なんです、横浜で新聞社にお勤めになられて、父が蔵書を置く場所が無いといった相談をしたら、すぐに良い場所を見つけて来て下さって、すごく幅の利くお方で、そういった采配と言いますか機転が利くところは実に見事でしたね。父は親族から頼りにされる場所がありまして、真岡には母のおじにあたる長尾のおじさんという方も疎開して来て、私達家族の住まいの近所に住んでおりました。このおじは丸三証券という会社を作った方ですけど、しかもそのおじもお寺の出なんですよ（笑）母の里はお寺なんですよ（笑）面白い思いですけれどね、そのおじは長尾という姓ですが、母もそうですけれど元々の生家のお寺の姓は楳泉（うめずみ）というんです。真岡に親戚を、何名も、そういうことができたということは父の力でしょうか、母の力なのかもしれませんけれど、なぜに、血縁のつながりが皆無である栃木県の真岡に、縁故疎開をさせて貰えたのか、しかも父方母方の親戚までも、ということについてなんです、疎開前に東京の荻窪に住んでいました時には、森戸の家に来て下さっていた女中さんがみなさん真岡のご出身の方だったんですね、何人か覚えておりますけれど、その中のお一人の方が、真岡で再会しまして、そのつながりがわかったんですよ。真岡からは女中さんを、東京の森戸の家で数人はお迎えしたわけですけど、なんでも、森戸先生には実に良くして頂いた、ということで、その女中さんの御家族の皆様方が、お迎えして下さったようなんですね、そして、特にそのうちのお一人の女中さんが、絶世の美女がいらっしゃいまして、その方のお父様が、東京に女中奉公に行かせる前に、娘が気ままな子で手を焼いていて、どれだけ美人で顔が良くとも、当時は戦時中ですし、女性に仕事があるという今のような時代ではないし、このままではどうしようもない、この子はまっとうな生き方ができるのかと、大変に困らされていて、娘さんの将来のことをとてもご心配されていたそうなんです、そして森戸先生のところに女中奉公として入ったら、私の母が、娘の私が言うのもおかしいですけどまた物凄い美人で、なんと言いますかその女中さんにとっては説得力があったのかどうか知りませんが（笑）そこで女中さんとしての礼儀作法からお仕事から、もういろいろと仕込んでもらったということで、東京ですっかり立派に育ててもらったということでお父様は感激なされていて、成長されて良く働くようになられた娘さんを見て嬉しかったんでしょうね、そのお父様が、真岡ではそれはもう色々良くして下さったわけです、それでなかったら、まったく見ず知らずの土地に縁故疎開なんてできませんものね、私も真岡での疎開中にその女中さんに再会しましたことを覚えております。

【嘉陽】終戦の頃から憲法草案作成の頃というのは、森戸先生はどのようになされていましたか

【檜山】八月十五日に終戦ですね、御詔勅があって、その二、三日前にね、栃木県の真岡に疎開していたところの、そこへね、ものすごい大量のビラを撒かれたんですよ、米軍の飛行機から、すごい綺麗でしたよ、白い紙でね、カラーではなかったですね、内容は覚えていませんけど、あのビラ、とっておけばよかったですね²、それが撒かれてから、すなわち戦争が終わるってことが内容だったんでしょね、父と母は「戦争が終わる」っていう話をしていましたよ。また「和平」という言葉が父と母の間ですごく行き交っていましたよ、「平和」という言葉じゃなくて、「平和でしょうか」というように、まあそれだったら人に聞かれても、という事情もあったのかもしれないけれど、耳に残っています。8月14日に、明日には重大な放送があるということを知られまして、その翌日の終戦の日は、正午に、当時住んでいた家の二階で父と母と私と弟と四人で、みんなが正座をして、畳の上で天皇陛下の御言葉を聞いて、その終戦の御詔勅の後にですね、すぐだったと思うんですよ、その午後のうちに、母は父に、「東京に、すぐお行きなさい」と言いました、ともかくその日の夜には父は真岡に居なかったですね、母は先を読む力があつたのだと思いますよ、その時代ですから、今と違ってなかなか情報が無いですし、その中で、父と母は話し合っ、パッと決めて、それが理にかなっていたというわけでしたので。それがちょっとも不自然でなかったですよ、母もそれに応じていましたし。それで、その時には何とも思わないけれど、今になって思うと、よくそれで、東京に行って、いろんな人に会えたと思うんですよ、ものすごくたくさんの方が集まったそうです、で何日かして父が帰ってきて、母が話すのに、誰誰さんと誰誰さんと、話し合った、と、不思議なんですよ、子ども心にも、今の私にとっても、よくあの焼け野が原で、そんなたくさんの方が、どこに集まったのかは知らないけれど、今みたいに携帯電話やインターネットや便利なものは何もない時代でしょう、固定電話だって普通の家庭にはありませんでしたし、しかも東京は空襲で広い範囲が焼け野が原になっていて、というような状況でしたから、そんな中でよく仲間に会えたなど、不思議ですよ、それで、東京で父が会った人のことについてですけど、正宗白鳥っていうお方は名前が変わっているじゃないですか、それで記憶に残っていますよ、電話も無い、そういう時に、どうやって、誰がどのように連絡を取り合ったのか知りませんが、やっぱり、それはそれなりにみんなやり方があつたのだと思います、父が東京に行って、何日か帰って来なかったでしょう、その後に帰ってきてからすぐに、何日だったかははっきり覚えていませんけれど、福山から（現在の広島県福山市）栃木県まですぐに人が見えて、やっぱりその時代の人の行動の早さ、今と違いますよね、よく、そんな疎開しているところの住所までわかつた

² 2021年6月に真岡市歴史資料室へ問い合わせたところ、当時のビラは資料として保管されていないとの返答があつた。

など、今となつては思いますけどね、その方々たちがすぐ「代議士に、」っておっしゃられていて、たしか年が明けてからすぐに選挙じゃなかったですかね、そのあたりは私のはっきりわかりませんが、まあそれは凄いお願いだったですよ、それで、真岡までお見えになること自体が凄い大変なことですよ、汽車も時刻表があるわけじゃないし、福山は広島でしょう、そこから東京へ出て、東京から栃木県の真岡まででしょう、ものすごい熱意とと思いますよ、人数もいっぱい来られていましたよ、みんなお米を持って、自分の食べぶちはみんな持っていて、その方々がどこに泊まれたかは覚えていませんが。

【嘉陽】森戸先生が国会議員になられた頃について教えてください。

【檜山】真岡の縁故疎開から、また東京に戻りまして、疎開前とは別の家に住みました、場所は同じく荻窪ですが、父は、当時は夜に帰宅する際に、人力車で帰って来るんですよ、荻窪の駅から、国会から中央線で荻窪まで帰って、荻窪から人力車、その時に後ろから自動車で追突されたか何かで事故にあったことがありましたよ、雨の日に、どこをケガしていたかは覚えていませんけどね、懇意なお医者さんがおられて、来て下さったりなんかして、帰りも遅い時間でしたねこの頃は、それとね、高野岩三郎先生が、放送局〈NHK〉の会長さんになられたんですよ、そういうこともあって NHK 放送局にもしょっちゅう行っていたみたいですよ、お手伝いでもないけど、帰りは夜中の九時十時でしたね、それで、家で食べ事も多かったですよ、いろんな人が来られて、でもいろんな人が来られても、他で食事することができないじゃない、だから食事時分になると、何かお出ししないといけないですからね、戦後の食糧事情が良くない頃ですからね、母は大変だったですよ、いろんなものを取っておいてもわからなくなるみたいで（笑）ビールがあるって行って注いでみたら醤油だったりして、みんなで大笑いしたこともありましたね、「黒ビールがあるんだそう」って言ってね、開けたら醤油だったって、お米自体があまり無い時代でしたから、みんなそれぞれに、さらしの袋を持って、そこへお米を入れて、移動して、でも全部の人がそれをするわけじゃないのよね、それで、泊まった方々にお弁当を作るにはお米なり要るわけですけど、銀シャリっていうのは滅多に炊けないのですよ、貴重なお米なんですから、人数分を作るのに混ぜご飯というのか炊き込みご飯というのか、増やすために混ぜ込んだご飯を工夫して、ですから食料を持参するというのは当時の常識みたいなものでしたね。

【嘉陽】戦前から戦後にかけて、特高警察に監視される生活から、文部大臣に就任するという大きな変化があったと思うのですが、森戸先生の御様子に変化はありましたか。

【檜山】それはまったく変わりませんでしたね、母も変わりませんでした、それに父の周囲の高野先生や大内先生も変わらない方々でしたし。そこはもう、皆さん心が動かない、芯の据わった方ばかりでしたから。

【嘉陽】東京では戦争の影響はどのようなものがございましたか。

【檜山】戦時中から戦後の、上野の地下道ですよ、あそこには空襲で家を焼け出された子どもたちがいっぱいまして、かわいそうでしたよ、本当に、私はそこを通りましたから、今でもはっきり覚えています、不安げな悲しい、表情でしたね、忘れようにも忘れられません、最近のウクライナの戦争で避難している子どもたちをテレビで見ましたけれど、もうそっくりでしたよ表情が、昭和20年の東京の焼け出された子供たちと、いつの時代も最大の犠牲者は子どもたちですよ本当に。

【嘉陽】森戸先生が片山内閣・芦田内閣の文部大臣の頃の思い出は、その他にございますか

【檜山】その頃は、与党と野党がそんなにいがみ合っていなかった印象ですね、後に総理大臣になられる芦田さんがその頃は部会の会長さんでしたかね、国会の中でもいろんな部会があるわけなんですけれど、その憲法部会か何かでしょうね、協力的だったようですよ、だから、憲法が割と、スムーズに入れてもらえたのではないですかね、今でしたらそういったことは成り立たないかも知れないですね、今でしたら何もかも反対反対になるでしょう、これは私の勝手な想像ですけど、大学時代の人たち、学生時代にお互いに学んだ、そういう人たちの絆みたいなものが大きいのではないかと思いますね、それでその、〈1919年の森戸事件で〉東大を追われたと言いながら、その時には、政府では全然ダメでしたが、民間の人たちは非常に同情的だったんじゃないかと思いますね、その知識階級の人たちは、そのあたりで、良いことは良い、という考え方というのでしょうかね、何でも反対ではなかった、と私は想像しているのですよ。だから澤田さんも吉田さんもそうだったんだろうと思いますけれど、みなさん、こう、割と、意思疎通がわりとできていたのではないかなと思うんですよ、一応東大じゃない、それで国体学じゃない、天下の秀才ですよ、特にそういうことで人文関係でしょう、戦時に、そういう人たちと真剣に国をどうしていかなくてはいけないって思う時に、できることは一緒にやろう、協力し合おうっていう、ことがあったんじゃないかと思いますよ、今みたいに与党と野党がすべてが反対、ということはなかったように感じますね。だから〈憲法の〉二十五条が割と上手く、いけたんじゃないんですかね。

【嘉陽】その他に国会議員の頃の思い出がありましたら教えて下さい。

【檜山】それから国会議員も、当選から何年かしてきますと資金繰りとか、やっぱりこれまでに以上にならなければならないわけですけど、真面目に取り組むと本当に神経を擦り減らしますよね。また、それでお金が潤沢にまわっていく人ならいいけれど父はそうじゃないでしょう（笑）なかなか難しいものがあったと思いますよ。

【嘉陽】議員さんで印象に残っている方はおられますか。

【檜山】大阪時代と議員時代からのお付き合いだと思うのですが、荻窪の家には、社会党の西村栄一さんという方も来られましたね、背広を着て、恰幅の良いお方で、大阪弁でしたね、井上良二さんと言う方も来られました。あと社会党では西尾末広さんも来られました

ですね、お手紙のやりとりもしておりました、社会党の方では河上丈太郎さんも来られていましたね。

【嘉陽】 文部大臣を辞職されて、広島大学学長に就任された頃のお話をお聞かせください

【檜山】 東京から広島への転居は、私と母と弟は、父が広島に転居して、しばらくしてから広島へ引っ越してきたんですよ、私は立教から広大の附属高校へ転入しました。草津の官舎〈広島市草津南 1958 番地〉から、宮島線の草津南から市電の宮島線に乗って己斐駅で乗り換えて、広大附属まで通っていましたね、当時は宮島方面や廿日市方面からも電車通学する学生が多かったですよ、それから市電には修道〈修道中学校、高等学校〉の男の子達もたくさん乗っていましたね、私もお弁当を持って、当時には皆、お弁当持参でしたから、東京に居た頃の立教女子の小学校や中学校、高校の頃には、給食があったんですけども、東京の頃には私学でしたから、戦時中でも違いはあったということでしょうかね。

【嘉陽】 広大学長になられてからの、森戸先生の生活について御聞かせ下さい。

【檜山】 それで少なくとも、広大に来てからは、広大をちゃんとしないといけないという気持ちがあるものがすごくあったんだろうと思うんですよ、そのためには、やっぱり、それだけやっとならなければ、文部省も面倒見てくれないわけですから、毎週に東京へ行って、文部省からやって欲しいとされたことはちゃんとこなして、文部省があてにするような存在になって、はじめて広大にも、ただ何もせずに広大広大と言っても、どこもやってくれないんじゃない、今の世の中でもそうだと思いますよ、それと、広島市の市議員さんとか県議員さんにも、ある程度、広島のためにということでやっておりましたよ、その時にはいろいろ批判のあった人たちでも、広大のために動いて下さる議員さんには、お正月に必ず、年始に行っておりました。東京へは毎週日曜日の夜に安芸という夜行で行って、月曜日の十時から文部省で会議があったようですよ、それに出て、またその日の月曜日の夜行で、広島へ帰ってきて、今度は火曜日の十時から広大で、会議があったようですよ、そののずーっと繰り返してましたね、夜行の通路かどこかで、体操をされていて、毎週のことで顔なじみの車掌さんからは「体操の先生」と呼ばれていたそうです（笑）学長在任の最後の方は日曜日に釣りに出たりもしておりましたけれど、初めの頃はとてもそんなことはできませんでした。広大の学長時代に、「学長を教える会」という会合がよくありましたね、講師の先生とか助教授の先生とか、若い先生方ですね、草津の官舎で、たいていその日はウナギだったんですけどね、こう、順番に講義する先生が変わって行って、それを皆で聴いて後に討論とかね、当時はまだ若かったけれど、後の北九州大学の今中さん、ああいう方がまだ若かった頃ですね。他に思い出は分校の火事、東雲だったと思うんですけど、ボヤがあって、そうして、なんか父が言っておりましたのはですね、火事があった時には、学長が責任をとるということが風習になっていたんだそうです、そんなことがありましたね。

【嘉陽】前身校が多くある広大の、いわゆるタコ足大学の統合にともなった御苦勞の御様子の思い出がありましたら教えて下さい。

【檜山】精力的に、各学部を回っていましたね、各学部の差というものも、あるわけですから、上げていかないといけないところもあるわけですよ、医学部なんか大変だったですから、なにがなんだかわからないのが医学部になっているわけですからね、だから医学部を卒業しても、就職先探しが難しい、そういう時代でしたよ、それで、河石九二夫先生という方が、たしか外科の先生でしたけれど、台湾大学から広大にみえたんですが、すごい御苦勞をされて、尾道だったか三原だったか、あちらの方へ一つ病院を造って、その院長をされていました、そうしたら院長と教授を兼ねてはいけないとかあったらしくて、そんなこと言っていて卒業生はどうするのかと、行き場が無いじゃないかと、それで河石先生は、やり切っておられましたよ、本当に当時の医学部は大変でしたね。

【嘉陽】海外の大学へ手紙を書かれた森戸緑化運動の頃について教えて下さい。

【檜山】広島へ来てから、割と早い時期に手掛けておりましたね、来た時が焼け野が原でしたからね、緑化のために、海外宛ての手紙を書いていたのを覚えておりますよ、それで、海外の大学に頼んで広大へ送って頂いたものを、広大だけでは消化しきれなくて、広島市の緑地課にもお願いをしてどこか貸してもらっていたんじゃないかと、メタセコイアなんかは、百メートル道路に植わっておりますよね、浜井市長の御提案とのことです、その時の苗木が、けっこう根付いておりますよね、今では立派になって、当時は焼け野が原ですから、なるだけ大学でなくとも、というのがあったのではないかと思いますね。

【嘉陽】草津の官舎の頃の思い出を教えてください。

【檜山】広大へ着任した頃、初めの時期、父が単身赴任の頃は東千田の大学の近所に秘書の西村博さんと住んでいたようです。草津の官舎へは、その後ですね、父が、単身赴任ではダメだって言いまして、その頃から広大も覚悟して、家を探してくれたんじゃないですかね、大学に学長公用車がありまして、東千田から草津の官舎へは学長公用車で加藤さんという運転手さんが迎えに来てくださっていました。家に電話もあったんですが、秘書の西村さんが、前日に加藤さんへ明日は何時に、というように御連絡していましたね、その日によって迎える時間はいろいろでしたよ、西村さんは草津の官舎の割とご近所にお住まいでした。学長公用車にいっしょに乗って、西村さんは共に行動しておられましたね、公用車の車種は、初めはフォードだったように思います、そのうち変わってクライスラーになりました、色はいずれも黒でした、母曰く「目立たない車がいい」と（笑）加藤さんは大変だったと思いますよ、父は大学に落ち着いている人じゃないですから、しょっちゅういろんなところへ行かないといけませんからね、水畜産（現在の生物生産学部）の方へも行っておりましたし、西条にも何かありましたよね、西条へもよく行っておりましたよ、あの頃は道も悪くてけっこう大変でしたよ、今ではいい道路ができていますけれどね、西村さんにも加藤さんにもお世話にな

りっぱなしでした。

冬の暖房器具は、その当時は火鉢と石炭ストーブでした、ストーブは、スコップで石炭をすくって入れる型ですね、水道は、元々は井戸だったようですけど、水道でしたね、汲み上げて水道、というかんじですね。うちの前から海が見えたんですが、国道があって、山陽線があって、市電の宮島線があって観光道路があって、その先が海でした、山陽線と宮島線の間には小さい土地があって、並木のように松の木が植わってありました、松の向こうに海が見える風景でした。国道からこちら側に崖のような場所があって、そこに官舎の家が建ってありました、用心の悪い家でした（笑）、犬を二匹飼ってありました、外にはシェパードで家の中には小型の犬を飼ってありましたね、コリーが居た時もありました。夜に、犬を連れて海に行くんですが、犬は喜んで海で泳いでおりましたね。家から海までは、直線距離ですと 100 メートルくらいでした、家から見て両側の駅の名前は井口と草津で、その間でしたね、今はその中間に駅ができていますね、丘のところに、それから山陽本線では、夜中に貨物列車が通ったんですよ、無蓋の箱のような列車でしたね、カラになったもので、あれはね、〈線路から〉浮くんですよ、だから、凄いな音がしまして、汽車の形をして上に天蓋がある列車は、さほどでもないんですが、貨物列車の方は、元はおそらく石炭を運ぶ列車ではないんですかね、無蓋の貨車ですね、全部無蓋の貨車が連なって、送って行くというのが、夜中であつたんですよ、それが重なったら十五分くらいは音が止まないんですよ、毎日、夜中の十二時よりも後に（笑）音が凄かったです、それでも慣れたら皆べつにどうこう言うことはなかったですね、近くに結核の療養所などもありましたよ。草津では、海が近かったですから、海では父に泳ぎを覚えてもらいましたよ、あの、日本泳法と言うんでしょうか、身体をこう、横にして頭をもたげて、侍が鎧兜を着たまま泳ぐ泳法ですよ、父は一高時代に学校で習ったようでした。

【嘉陽】 森戸先生の沖縄訪問について思い出がございましたら教えて下さい。

【檜山】 沖縄は、そのころは外国ですからね、沖縄へは、行くたびに花萬〈はなまん〉という広島の花の卸売業のお店から大輪の菊の花を仕入れて持って行っておりました、沖縄には当時、大輪の菊の花が無いとのことで、慰霊碑にお供えするのに、戦争で亡くなられた方々、沖縄では学徒も子どもたちもたくさん亡くなられているということで、戦死なされた方々にお供えする、ということで、行くたびにもうたくさんの菊の花を運んでおりました。昭和 33 年の沖縄講演会の時には屋良〈朝苗〉さんがかなり計画して下さったと思います。屋良さんはそれまでに草津の官舎に何度かお見えになって、打ち合わせで準備を進めていたようでしたけれど、屋良さんの思い出は、いつもきっちりとした背広で、それで話されるお言葉が、何ともいえないあの沖縄の独特のイントネーションなんですよ、父と屋良さんのお話から察するに、この講演会は教育の現場から平和をつくるには、という内容を含めて沖縄県内の数カ所で講演をしてきたのだと思います、その時の写真がありましたよね。

【嘉陽】森戸先生が撮影された御写真には植物が多いですが、花や植物などについての思い出がございましたら教えてください。

【檜山】父は、割と植物が好きな人でしたね、それでどういう経緯かは分からないんですけど、埼玉県に安行〈あんぎょう〉というところがあって、そこにある椿農家さんにつながりがありました、私もそこに連れていってもらったことがあります。安行というところはそれぞれの農家で一軒一軒が門外不出の植物を持っていて、皆が一家言あるのだそうです、それで戦争の頃というのは食糧増産、ですよ、戦時中にそんな椿なんて役に立たないものは植えるなど、そんなものより米や芋を植えろと、非国民と言われて大変だったんだですよ、それだけでも、それに、逆らって、椿の苗を保存して、やり切られたという方がおられて、すごくそれで意気投合していましたね（笑）。ですから草津の学長官舎には安行から頂いた椿が大方、何十本かありましたよ、今ではどうなったか知りませんが、鉢ではなく苗で、戦争でね、その頃にそれぞれのところを守る、というのは、皆が大変だったんですね、でもその椿農家さんの強い思いで、日本の椿が守られたわけですからね。

【嘉陽】森戸先生の服装などについて教えてください。

【檜山】これは母の仕事で、質の良い布を探してきて、それを、しっかりした洋服屋さん、銀座のフルハタ兄弟のお店に、今はもうないと思いますけれど、ダブルの方がいっぱい物を入れても目立たないと言っておりましたよ、シングルだと目立つ、とのことでした、形が崩れると、もう名刺から何からいっぱい入れていましたからね（笑）内ポケットやらなんやらかんやら、ネクタイは、母が面倒見ていたと思うんですけど、割とたくさん持っておりましたよ。

【嘉陽】森戸先生と百働会について教えてください。

【檜山】百働会は、初代の会長はお受けしておりましたけれど、父が設立したものではなくて、眼科の深川先生という方が御熱心に力を尽くされて興した会なんですよ、百働会につきましては、その方に引っ張られたと言いますか。たしか広島大学の文書館に、会報、雑誌が残っているはずですよ。福山では参加者も多くて、今でも続いておりますかね。

【嘉陽】森戸先生と釣りについて教えてください。

【檜山】釣りは、もう父の生涯でずっと続いた趣味ですね、私が物心ついた頃からの記憶がありますから、東京でも浅川、相模川、と、日曜日に朝一番に出て終電で帰ってくるということがよくありました、家族の者は一緒には行きませんでしたけれど（笑）父は川釣りが好きなんですよ、もちろん海にも行っておりましたけれど、広島では忠海、太田川の北の方へも良く行っておりました、アユ釣りがまたとても好きでしたよ、釣った魚は家に持ってかえってくるときもありましたし、帰途でどなたかにお渡ししていただくこともありました。釣り竿も凝っていて、銘が入っているようなものもありましたよ、川釣りのものでは組み立て式

のものともありました。父があまりに釣り好きだものですから、学外から講演会を頼まれる際には、ご依頼される方々も心得ておられて、まず釣りのお話から始められるんですよ（笑）「ちょうど今ごろに、何々がつれまして、」なんておっしゃられて（笑）講演会と釣りがセットになっておりました（笑）でも行ってみたら「三尺くらいの小川があった」なんて笑っていたこともありました。

【嘉陽】森戸先生と有花会について教えてください。

【檜山】広大学長の着任後に、正確な年度は覚えておりませんが有花会〈ゆうかかい〉ができました、有花会の名称は蘇東坡の詩から取ったのですけれど、花あり月あり楼台あり、広大の文書館に、川村幾三という方が書かれた、軸があります。有花会は母が代表になって、もちろん父も役員に名前がありました、広島市長の浜井信三さんや広島県知事の大原博夫さん、皆様が御協力して下さったんですよ、趣旨としては、身近な電車通りや、花壇などに花の種をまいたりして、心を和ませる風景が少しでも広がればという、誰にでもできる内容を、ということで始めたものです、現在の 100 メートル道路の初めのところから始めたのですけれどね、100 メートル道路は浜井さんが大きく取っていましたからね（笑）それだけに大変でしたよ、戦後には背の高さくらいの雑草が生えていて、それはもう荒地でしたから。難しい事を言うよりも少しでも花の美しさで潤して、という考えだったと思います。有花会の石碑が市内のどこかにありますよ。

【嘉陽】森戸先生の御墓所が東京文京区の白山、蓮華寺にある理由を教えてください。

【檜山】福山藩の阿部公の土地が東京にあって、それで藩のお侍の人は東京に行くことが昔からあったようで、その御縁で東京の白山に森戸家の墓地があるわけですね。

【嘉陽】森戸先生の宗教観があれば教えてください。

【檜山】父はかなり昔に聖公会に御縁があったみたいですが、私たちが産まれてからは信者ではなかったのではないかと思いますよ、私が知る限りでは父が教会に行っていたという記憶は無いですね。

【嘉陽】森戸先生は、食べ物の好き嫌いやお酒等の嗜好はございましたか。

【檜山】お酒はとても強かったです、が、飲まなかったですね、父の父、私の祖父にあたる森戸鸞蔵さんという方がお酒でいろいろあって、それを教訓に飲まないようになったようですね、お茶は良く飲みましたよ、自身が魚釣りをするものでしたから、魚は、刺身も好きでしたし、肉も食べておりましたね、好き嫌いをする人ではなかったです。そして果物が好きでしたね、特に柑橘が好きでした、それが健康のもとだったのかもしれませんが、凄かったですよ、広大（東千田）から草津の官舎まで帰って来る間に、多分、なじみの果物屋さんがあったんだと思うんです、そこへ寄って、買って帰る、いろんな馴染みがあるんですよ、

八百屋さんの馴染みとかね、大学の帰りに基町の、商店街の一本入ったところに大きな八百屋さんがあって、近くに魚屋さんがあって、運転手の加藤さんは大変だったと思いますよ（笑）割とそういうのが好きな人でしたね、それで、大勢の方々と会食、ということもあるんですよ、その時に今でいうデザートですよ、ミカンとか、それを全部、自分が剥くんですよ、それが早いんですよ（笑）器用な人でしたね、そういうことには、西条の柿も毎年、出るのを楽しみに待っておりましたね。東千田でも、昼食には学食で、学生と同じ内容のものを食べていましたね、うどんとか、そうして必ずミカンなんかを持って行くんですよ。学生と同じものを食べる、と、その頃はまだ食料がゆたらかではない時代ですから、だからそれで、学生さんの栄養が足りているのかどうか、というのはよく言っておりましたよ、「牛乳を付けるようにしなさい」とかね、牛乳は水畜産学部でとれるから、それを上手く回して、ということ、母が言い出したのかな、それを父に話していました。

【嘉陽】森戸先生は旧制の一高の思い出を話されることはございましたか。

【檜山】一高の寮歌について、どなたかその時代の同級の方が訪ねてこられた時には一緒に歌っていましたね、「ああ玉杯に花受けて、緑酒に月の影宿し・・・」の歌ですよ、一人で歌うことはなかったですね。

【嘉陽】森戸先生の名刺についての思い出がございましたら教えて下さい。

【檜山】父はいつも胸ポケットには名刺をたくさん入れていまして、学生の就職について宜しくお願い致します、という目的で渡していたんですよ、名刺に印刷してある森戸辰男の字もそう大きくない書体ですが、学長時代はずっとこの名刺を使用していたはずですよ、また裏面の英語の表記の、「Mr.」の部分ですが、「Dr.」ではないというところに、とてもこだわっていたようですよ、その理由をはっきりと聞いたことはないんですけども、おそらく、東大時代の例の事件のことが関係しているのではないかな、と私は思うんですけどね、はっきりと訊ねたことはないのですが。

【嘉陽】森戸先生と書道について教えて下さい、ご家庭でも筆で作品を書かれていましたか。

【檜山】父は、人から頼まれたらすぐに筆をとって書いておりましたね、書くのは早かったですよ、父は、どなたかと話した時に世間話でもその中で、書について、会話の端に軽い気持ちで話題に出されたものとしても、父はしっかりした作品をお渡ししていましたね、貰った人はびっくりしていたかもしれませんが（笑）、作品を書いた年月日と森戸辰男と名前を書く時には、一般的には小筆に持ち替えて書くじゃないですか、でも父は太い筆の穂先をととのえて、そのまま太い筆を使って穂先で細目の字で名前を書くんですよ、条幅でも、色紙でも、もちろん、初めから小筆で作品を書いていたこともありましたがよ、父は自分自身は字が上手いとはまったく思っていなかったようでして、だからもう、しっかりと練習して書けばいいというような、下手の横好きという自由な発想だったんじゃないでしょうかね（笑）

私も昔に、何か書いてよ、とお願いしたことがありまして、掛軸を書いてもらったことがあります『無一物中無尽蔵』という文字で、今でも時々、床の間に飾っておりますよ。父は生前には色紙も条幅もけっこうな数を書いていると思います、あなたが以前にまとめてくださいましたけど、まだ他にも、どこかで所蔵されている方がおられるかも知れませんね、父の知り合いの世代の方々と言いましても、年代的にもうお亡くなりになられての方も多いでしょうからね、あと、印が押してある作品は、晩年のものだと思いますね、広大時代のものには印は押していなかったと思います。現在に、広大の中にも保存されて残っている作品があるかもしれませんが、広大時代に書いたものには印は押してないと思います。水畜産学部の「豊潮丸」〈二代目の実習船豊潮丸〉の船首の文字は、父も海が好きでしたから、よく泳いでもおりましたし、魚釣りも海でも川でもしておりましたので、思い入れがあったのだと思いますよ。

【嘉陽】 森戸先生が、広島大学にかけた情熱とはどのようなものだったのでしょうか。

【檜山】 それはもう、広大が可愛くてしかたがなかったみたいですよ（笑）タコ足大学と呼ばれていた状態を、戦後の復興も併せて進めて行くわけですから、自分は少々の犠牲は払う、少々の無理はする、という姿勢でしたね、毎週に夜行で文部省への会議へ向かって出席して、広島に戻ってからは広大の会議に出席して、それこそ文部省もよく協力してくれたのでしょ、逆に文部省からの頼まれ事もよくやっていたようでした。だから、これは私の想像ですけど、とにかく広大をちゃんとしていくためには、文部省ときちっと関わって、文部省の仕事もしっかりやると、その結果として少なくとも広大にそれが還ってくるという、人の世の流れと言いますか、そういうことがあったのではないかなと、父の気持ちの上では、と思います、それは文部省よりも広大の方が可愛かったと思いますよ（笑）ですけど握っていますのは文部省ですからね。

【嘉陽】 ご自宅にお越しになられていた先生方には茅誠司先生や長田先生もおられましたか。

【檜山】 こういった先生方は滅多に見えませんが、そうそうたる方々ですから、若い先生なんかは我が家によく見えておられましたよね、そしたら、弟が言うのに、「べつにお父さんだけに会いに来たわけじゃないよ、若い先生たちは、お母さん見に来たんだよ」って言うもんですから（笑）で広島に来てからは、さすがに私もそうは思うことはなかったけれど、東京にいるころなんかもっと若いわけでしょう、その時なんかの頃を今、思い出すと確かに、本当に、早稲田の若い先生方なんかずーっと座っていたような気がしますよ、「お母さん目当てもだいぶおったよ」って（笑）私ら親子でしたから特別には思いませんでしたけれど、皆が言うのに母は凄い美人だったそうですよ。それから茅誠司先生、とても親しくしておりましたよ、父とは歳も随分と離れておりましたけれど、二人の専門領域がまったく違うことも良かったのではないかとおもいます、父は経済で茅先生は理学だったですかね、茅先生は東北大学の御出身で、東京大学の総長になられた方としては初めての東大以外の御経

歴の総長ではないかと思うんですよ、それから茅先生は理系のご出身でおられましたから、東大は文科が強いから、大変に御苦勞をなさったことと思いますよ、何かと父を頼りにしておられて、草津の官舎にも何度かお見えになられていましたね。沖縄にも一緒に行かれていたのではないかと、あと茅先生は国立大学協会の会長をされておりましたね、その時も父が副会長をしてサポートしておりましたね。中江大部先生という工学部の部長さん、あの方は凄く良くして下さいましたよ、いわゆる学校関係ということも確かだったですけど、いろんな会合をするじゃないですか、学校関係の、その時に、父は忙しいから途中で抜けたくなるわけですよ、飲んだり食ったりも入るとですね、そうするとこの中江さんがちゃんと後をきれいに仕切って、なかなか他の先生ではそこまでできなかったですね、お正月にもいつも見えて、今みたいでなくて年始で皆さんまわっておられるんですよ、その相手をするのも結構大変なんですけれど、中江先生がみんなしてくださったんですよ、凄く洒落た先生でした、それから、当時そんなに若くはなかったですが、雑賀先生ですかね、そんなにしょっちゅうの出入りはなかったですけど、奥様の方が出入りがありましたね、雑賀忠義さん、この有名な先生はなかなか目先の効く人物でしたね、平和公園の慰霊碑文を書かれた、先生のお子様も珍しい御名前でしたからね、本名と思うんですけど、雑賀先生の印象は凄く洒脱といいますか、絵もお上手だし、ですから原爆慰霊碑の配置なんかもお上手ですよ、字も独特な書体ですよ、なにしろ変わった先生でしたね、すごく洒脱な、洒落た、お方だなと私なんかは思っておりました、そうしましたら、学部の方が「そんなことはないですよ」って、なんのことかと思いましたが、当時はまだ個人宅に電話はあまりなかったんですが、大学のお電話も私用電話にも使っておられましたようで（笑）変わったお方でしたよ、時々うちにも見えておられたですけど、いい意味での感性の鋭いような印象ですね、立ち居振る舞いは普通の印象ですね、後の学長になられる、皇先生なんかよく見えてましたよ、皇先生は、それはもう真面目で「それしか取り柄はないですからね」とおっしゃられておりました（笑）、あと川村先生、たしかカエルの先生ですね、ちょっとよく存じ上げないですね、田中隆莊先生もお名前は存じてますがお付き合いは全然なかったですね、それから、長田新先生は広島文理科大学の学長さんだったですよ、広大の学長にはなられていなかったですが、この先生を推した方々が多いと思いますよ、教育学部で、お弟子さんかどういふ方々か知りませんが、ファンが多いんでなかったかと、広大からは、出られたのではなかったですかね、けっこうお弟子さんはおられるんですけど、文理科大学の系統もありますし、長田先生の詳しい御職歴は存じ上げないですね、お弟子さんも、もう現在ではリタイアなさっておられるでしょうけれど、私は長田先生にお目にかかった記憶はないですね、噂はよく聴きましたけれど、あの時の教育学部の部長さんはどなただったんだろう、教育学部でよく出入りされていたのは莊司雅子さん、彼女は台湾の御出身の方でなかったかと、東雲にお住まいで、なかなか生き方は偉いお方だったですね、晩年は車椅子だったですよ、そうして車椅子で、どこへでも行かれておりましたね、今みたいに車椅子で動くことができやすい世の中ではなかったですからね、広島駅でも大変でしたから、でも、「どこでもいいのよ貨物を載せるところで

降り降りさせて下さい」って言われて、とにかく行けたらいいんだから、って、それでいろんなところへ行っておられましたね、宝塚の方の大学へも行っておられました。

【嘉陽】森戸先生は、広大の退官後にすぐに東京へ行かれたのでしょうか。

【檜山】間髪入れずに、でしたね、なんでそんなにすぐに、と私も思いました、凄い忙しかったですよ、私はこちらで結婚しておりましたから、なんやかんやと訳が分からないくらい（笑）、なんか思いがあったんだろうと思いますね、一人で東京へ行きましたからね、また中央審議会の方は、いつからのことか知りませんが、文部省との関りは学長時代から、中教審とは、続いていたんでしょうからね。

【嘉陽】森戸先生の御逝去の頃の思い出を教えてください。

【檜山】父は昭和59年（1984年）に東京で亡くなるんですが、亡くなる少し前から、その時には確か東京医科歯科大学病院に入院していましたね、お見舞いには、お茶の水の駅から歩いて、細い道を通って入院先へ行きました、アナゴの焼いたものをお土産にもって行きましたね、割と最期まで、意識は、はっきりとしていまして、意識がおかしくなったな、という印象は無いですね、またかなり最後の頃まで自分で立って歩いていましたから、散歩が好きでしたし、長患いで大変だったという思い出も無いですね。

【嘉陽】森戸先生の人生観とは、どのようなものだったのでしょうか。クロボトキン事件で有罪判決を受けて東大を辞めさせられる等の御経験があつてからの文部大臣、広大学長であります。

【檜山】あまり、その、辛いとかそういうことは、父は、どうだったんだろうと思いますよ、東大を追われて大阪へきても、結構すぐに、いわゆる、労働者の学校を造ってみたりしているじゃないですか、あんまり苦じゃなかったなかつたのではないかなという気はしますね、その中で生きていく、っていうことですね割と、それこそ自由な人、終戦と同時に議員への立候補の依頼がきたりしたこともありますけれど、時代によって必要とされることもあるし、その時点でその場所で、自分が何ができるか、ということ割と的確にわかる人だったんじゃないですかね、だから、あまり、困らないと言ったらおかしいですけど、その森戸事件で、東京を追われて、大阪へ来たとき、そうしたら大阪へ来たすぐに、無償といいますが、学費を取らない労働学校なんか造っちゃってますよね、どうやって食べていたのか知りませんが、ああいうことができる、けどそれは誰かが助けてくれなければできなかったと思うんですけど、それが出版社なのかどなたがだったのか、知りませんが、で、多分ですが、労働学校を造れば、そういった人たちとの関わりがあるだろうと、それだけではないんですよ、学生時代にあった、大学時代の友達、友達といいますか仲間といいますか、そういう方々との関係性も、ちゃんと保っていますよね、それが、大阪へ来てからのことで、面白いことといいますが私がちょっとわからないことがありまして、佐伯祐三さんという絵

描きさんがいるんですけれど、凄く有名な方で、ファンが多いんですよ、私が小さいときに、東京へ住んでいる頃に、いつだったか詳しくは覚えていないんですが、母が銀座に連れていってくれたことがあって、それが佐伯祐三さんの奥様の、佐伯米子さんの展覧会だったんですね、その時に何の絵を見たかは覚えていないんですよ、で、その佐伯米子さんという方がその当時に、ピンクの和服を着てらして、凄く綺麗だったことを覚えているんですよ、後からその佐伯米子さんは佐伯祐三さんの奥様だと知るんですけれどね、ピンクの和服、とても目立っておられてね、それでその後いろいろあって、大阪で、大阪というか阪神間で、父とはまた関係ないかも知れないんですが、グループがあったのではないかと勝手に思うんですけれど、その中に佐伯祐三さんとか、河盛好蔵さんとか、フランス文学の方ですね、いろんな方々との交流があったのかなと思うんですね、それで、そんなに有名な佐伯祐三さんの絵がなんでうちには無いの？と母に聞いたことがあるんですが、母が言うには「うちにもあったんだけど、あなたが産まれるときにものすごく難産したから、その時の産科のお医者さんに、御礼に差し上げたのよ」という話は聞いたんですよ、そうしたら、ずいぶん昔の話になりますが、ある絵描きさんが出入りされていた時に、「森戸先生のところにある佐伯祐三さんの絵が、鹿児島県庁のどこかに掛かっていますよね」という話になって、私も気になったので、どなたかまた別の方に「佐伯祐三さんの絵が鹿児島県庁にあるらしいんですが、どんな絵か知ってますか」と尋ねたら「あれは有名な絵です」ということでした、でも現在にその所在がどこかというのは私は存じないんですけれど、佐伯祐三さんと言えば一時は寵児でしたからね、ああそれは母との関係だったんだなと思いましたよ、そのグループが坂本勝さんとか、河盛好蔵さんとか、すごい方々とのサロンみたいな感じだったのではないですかね、いろんな面白いことってあるんだなと思いましたよ、当時は今みたいに車もなにもないですから、ですから動くといいましたら大阪関係は省線という電車があるわけですよ、宝塚とかああいったところにも、だから今でいえば佐藤愛子さんなんかそのあたりで目立ってお方でしたね、佐藤紅縁の娘さんの、サトウハチローさんもそうでしょう、今みたいにそれぞれが車で動くのではなくて、けっこうそういう方々は目立ったのではないかなと想像してみるんですけれどね、父は大阪に行った方ですけれど、母なんかは地ですから、尼崎の出身ですから、そういった場所での関りがあったのではないかと、これも想像してみるんですけれどね。

【嘉陽】森戸先生が、さまざまな立場の人へ学習の機会を提供したいと話されていたことはお聴きになったことはございますか。

【檜山】勤労者への学びの場をということでは、広島大学の夜間学部は、あれは父の肝煎りです、絶対に夜学は必要だっていうことは申しておりました。やはりそういった学びの場がありましたら、それを知った方々は、働きながらも勉強したいという気持ちのある方々は集まって来られますものね、なにも大学はお金持ちの方々のためだけにあるものではないですからね、どんな家庭にあっても勉強したい志のある人には学びの場を提供することは大学

の役目ですし重要なことです。今はどうか知りませんが、広島証券という証券屋さんがあったんですよ、斎藤さんというお方が非常に御苦勞をされて創られたんだそうですけれど、そうして、戦争中からか、こちらへ来た時にはすでにあっただすね、それで、雇っている子どもたちに、広島大学というのができて、夜間もあるんじゃないかと、働きながら行けるんだと、店員さんに勧められたと、勉強しろよ、と、聞いたことがありますね、証券取引所はありましたが、証券屋さんは合併など多いですから、きっと現在にはもう当時の会社では残っていないでしょうけれどね、その証券会社さんも。

【嘉陽】 森戸先生の、ご家庭での様子を教えてください。

【檜山】 父は家庭ではとても、子煩悩な人でした、それは誰にでも変わらず優しい人でしたので、大学でも、同じだったと思うのですが、人当たりが凄く柔らかくて、穏やかな人でしたよ、人のお話を聴くのが上手かったですしね、自分が積極的におしゃべりする人ではなかったですね、それは、私が物心ついた頃からずっと、生涯を通して変わりませんでした。すごく自制心が強いんでしょうね、表面は物凄く穏やかな人でしたよ。だからおそらく、大学の職員さんでも、怒られたという人はいないと思います、声を荒げたことは見たことが無いですね、人生はいろんなことがありますけれど、どんな時でも、怒るような感情を出すということは無かったです。家庭人という面では、それがいつも我が家には私と父母弟以外に、どなたかが居られたんですよ、東京の頃からですけれど、書生さんであったり、書生さんは台湾のご出身の須之内さんという東大の国文科の方がおられましたね、女中さんであったり、親戚の誰かであったり、という以外にもどなたかがお客さんで泊まっておられるとか、ですから家族だけでどうこう、という生活の印象はあまりないですよ、いろんな方々が入り込んでいましたからね、草津の官舎の近所にお住まいで、朝晩のお食事を一緒に食べておりました青山兄弟というお二人は、お兄さんが義彦さんで、政経学部の一期生だと思っています、弟さんが邦彦さんで水畜産学部の学生さんでした、なぜ我が家に毎日、出入りされていたかと申しますと、お二人のお父様が因島の小学校の校長先生でいらっしゃる、父が戦後の頃に大変にお世話になったことがあったらしいのです、その御縁で、息子さん方が広大に通う際には草津からということになったようで、草津の官舎は当時あの辺りは家もお店もそんなになくて、生活するのが大変だったんですよ、例えば来客用の部屋が幾つかあったのですが、その暖房と云ったら、火鉢なんですよ、洋間に石炭ストーブがひとつありましたけれど、その火鉢に炭をおこすのに、炭は何十俵と買うんですけど、炭は買った時には、使えるようにはなっていないんです、一尺以上の長さで、それは、各家庭で切らないといけなんですよ、それを切るのも大仕事なんですよ、応接用の十畳の洋室と和室が次々埋まるくらいにお客さんがみえていましたけれど、部屋を暖めようと思ったら時間もかかるし準備が必要でしょう、その炭切りを、青山兄弟にやって頂いておりました（笑）そのお二人とも、もうお亡くなりになってはすけれど、お二人の奥様が大阪と仙台におられますけれど、未だに御親切にお付き合い下さっておりますよ、ありがたいことです、義彦さんも邦彦さ

んも、父が広大を退官して東京へ行ってからも、ずっと足しげく交流は続いていたようで、東京にお見えになった時に、いつだったかのお正月に父が揮毫した書をお渡ししたものを、綺麗に額装して下さってその後に大切に保管して頂いてきたそうです。先日その額を私も拝見しましたが、父の字は懐かしいですね。草津の頃には女中さんはお二人住んでおられました、お客さんが来た時にはその女中さんもフル回転でしたよ。大学のお客さんというのは、海外の方も多かったですけど、宮島に観光に行かれてその足で我が家に来られることも多くて（笑）「素通りはできません」なんて言われて（笑）大学関係の他にも市政の方でしたり議員さんでしたり、労働関係でしたり、父の専門がそういった労働に関わる内容でしたから、学者の方も、もういろんなご専門のお立場の方々の出入りがひっきりなしでしたね、職工さんも、また今で言う労働組合を作りたいというような、当時には労働組合という言葉は無かったですけれど、集まって勉強した方が良いのではないかという考えを持った方々がお越しになったり、相談にきたり、でも父が日中に自宅にいつも居るわけではなくて、お客さん方は昼夜構わず見えるわけじゃないですか（笑）貨物列車に乗って遠方からお越しになった方なんかは、頭から煤だらけということもありましたから、それを見たら母は、まずはお風呂に入ってから、ということで、お風呂から焚くわけですが、その頃には薪でお風呂を焚くわけですけど、これは広大の時代からではなくて、東京の頃からずっとでした、若い先生方がうちで議論したり、それから、お越しになられる方々は、白いさらしの袋にお米を入れて持って来て下さいました、食い扶持、というんですけど、これでごはんを作して下さいとかたちですね、学生さんなんかは何も持ってない方もおられましたけれど、これはもう、当時の日本では皆がしておりましたですね、東京の荻窪の頃にも、議員さんがお米を持って泊まりに来て、それからお弁当を持って国会に出かけて、という生活でした、それでも白米だけの銀シャリなんて夢のまた夢で憧れでした、お米が少ないのでいろんな食材を炊き込んで工夫して、かさを増やすんですね、野菜でしたり、麦は必ず入っておいましてし、今の日本からは信じられないようなつつましい生活をしていたのが当時でした、母はそういった切り盛りも、来客対応もよくやったと思いますよ、東京でも広島でもずっとでしたから、母はもともとがお寺の出ですので、そういった来客対応には子どもの頃から慣れていたのかもしれませんが、それはあったとは思いますがね。その頃には日本がまだこれから復興していくという時代で、なにしろ食べるが大変でしたから、田舎の子はお米を持ってきたりもできますけれど、都会の子はどうしようもないですよ、もう本当に、食糧難の、大変な時代でした、例えば、カボチャなんかでも食べたら、種が残るじゃないですが、それをうえて、芽が出るのを楽しみにして、育てて食べるなんてことをよくしておりましたよ、今年は何個なった、なんて言って（笑）今からは考えられないようなことですけど、私の家だけでなく、東京の人たちも広島の人たちも、私たちの周囲の皆さん方みなさんが大変だったと思いますよ、そういう時代でした。

【嘉陽】 森戸先生の御人柄について教えて下さい。

【檜山】それはもう大変に情の深い人でした、これまで父の仕事の上でのことを多くお話ししてきましたので、家のことでお話ししますと、広大の在任中に母が亡くなるんですが、母はまだ 50 代でしたけれど肺癌だったようで、もともとが身体の強い人ではなかったですので、千田町の日赤病院に入院していたんですね、そうしたら、学長室から、毎日の朝昼晩、日赤病院の入院室がある 4 階へ面会に行っておりました、4 階まで階段を使って、歩いて行っておりました、広大と日赤病院が近かったということもあるんでしょうけれども、父はそういう人でした。母はまだ私が結婚する前に亡くなりましたので孫は見えていないんですね、父は孫が産まれた時にはそれは嬉しそうでした。また、筆まめな人でして、海外出張先からもよく葉書を母に送っておりました。大きい存在でしたけど、人を縛らない人でしたね、これも、誰に対してもそうでしたね。

【嘉陽】もし、今、森戸先生とお話しすることが叶いましたら、どのようなこととお話しなされたいですか。

【檜山】さあ（笑）こちらが父に訊いてみたいですね（笑）変わらないと思いますよ、いつの時代のいつの時にも父は優しく、温かかったですから、それは父と接した人でしたら皆さん共通して思われるとおもいますよ、きっと昔と同じく、生前の時のままに、話してくれると思いますね。母は父に対して「あなた」と呼びかけていて、父も母に対しては「あなた」と呼びかけていました、父から私には「洋ちゃん」でしたね、弟はそのままで「やすし」でした、私と弟から父へは「お父さん」でした。

【嘉陽】本日にも長時間、誠にありがとうございました。

【檜山】いえいえ、どういたしまして、また何か、私でお役に立てることがございましたら、なんなりと、私ももう 89 歳ですからね、早く訊いておかないと、「しまった、訊いておけばよかった」ということになりますよ（笑）こちらこそありがとうございました。

5. 謝辞

檜山洋子氏には長期間にわたる取材に懇切に御対応を頂き、所蔵資料についても詳細に御解説を頂きました。青山義彦氏、青山邦彦氏、両氏の奥様である青山洋子氏、青山和恵氏には森戸辰男が揮毫した扁額につき詳細に御解説を頂きました。読谷村史編集室からは昭和 33 年沖繩講演会の所蔵資料をご提供頂きました。また匿名の査読者による適切なコメントによって本稿は大きく改善しました。御協力を賜りました各位に深く感謝を申し上げます。

参考文献・参考資料

西村博（1999）、「講演 森戸辰男氏と広島大学」『広島大学史紀要』（1）、27-47

真岡市歴史資料室への筆者による聞き取り調査（2021）、2021年6月9日実施

【写真1】 檜山家資料

【写真2】 檜山家資料

【写真3】 檜山家資料

【写真4】 檜山家資料（撮影・嘉陽礼文）

【写真5】 檜山家資料（撮影・嘉陽礼文）

【写真6】 檜山家資料

【写真7】 檜山家資料

【写真8】 檜山家資料

【写真9】 檜山家資料

【写真10】 檜山家資料

【写真11】 檜山家資料

【写真12】 檜山家資料

【写真13】 檜山家資料

【写真14】 檜山家資料

【写真15】 檜山家資料

【写真16】 檜山家資料（撮影・嘉陽礼文）

【写真17】 読谷村史編集室資料（部分拡大画像）

【写真18】 読谷村史編集室資料（部分拡大画像）

【写真19】 檜山家資料

【写真20】 個人所蔵資料（撮影・嘉陽礼文）

【写真21】 個人所蔵資料（撮影・嘉陽礼文）

【写真22】 檜山家資料

【写真23】 広島大学生物生産学部所蔵資料（部分拡大画像）

【写真24】 檜山家資料（撮影・嘉陽礼文）

【写真25】 檜山家資料

【写真26】 青山家資料（撮影・嘉陽礼文）

【写真27】 青山家資料（撮影・嘉陽礼文）

【写真28】 青山家資料（撮影・嘉陽礼文）

【写真29】 青山家資料（撮影・嘉陽礼文）

【写真30】 檜山家資料

【写真31】 個人所蔵資料（撮影・嘉陽礼文）

【写真32】 檜山家資料

【写真33】（撮影・嘉陽礼文）

写真資料



【写真1】戦前の森戸辰男と洋子、1938年～1940年頃、兵庫県・西宮。



【写真2】戦前の森戸辰男と岸子、1935年～1940年頃、兵庫県・西宮。



【写真3】 集団疎開の頃の洋子、1944年頃、長野県・別所温泉（左から5人目と思われる）。燃料の粗朶（そだ）を運んでいる様子。



【写真4】 栃木県の真岡での縁故疎開中に使用した、ふくべ細工の炭入れ、1945年頃のもの。
【写真5】 森戸辰男のトランク、1921年前後のドイツ留学以後に使用してきたもの。



【写真6】文部大臣時代の森戸辰男、真岡の縁故疎開の後に転居した東京・荻窪の家、1947～1950年頃。（左・岸子、中央後方・森戸辰男、中央手前・泰、右・洋子）



【写真7】文部大臣時代の森戸辰男 1950年、東京都・国会議事堂。



【写真8】広島大学学長時代の森戸辰男、1950年代、広島県・草津の広島大学官舎（三列目・学長秘書の西村博氏、二列目左・岸子、中央・森戸辰男、二列目右・洋子、一列目中央・泰）。



【写真9】広島大学学長時代の森戸辰男 1950年代、広島県・草津の広島大学官舎（左・洋子、中央手前・泰、中央後・森戸辰男、右・セイ）。



【写真10】広島大学附属高等学校生徒時代の洋子、1950年代、広島県内、生徒手帳の写真。

【写真11】写真10の下部の拡大画像（「広島大学」の文字が読み取れる）。



【写真12】広島大学学長時代の森戸辰男、1950年代、広島県内と思われる（中央・森戸辰男、右端・学長公用車運転手の加藤氏）。



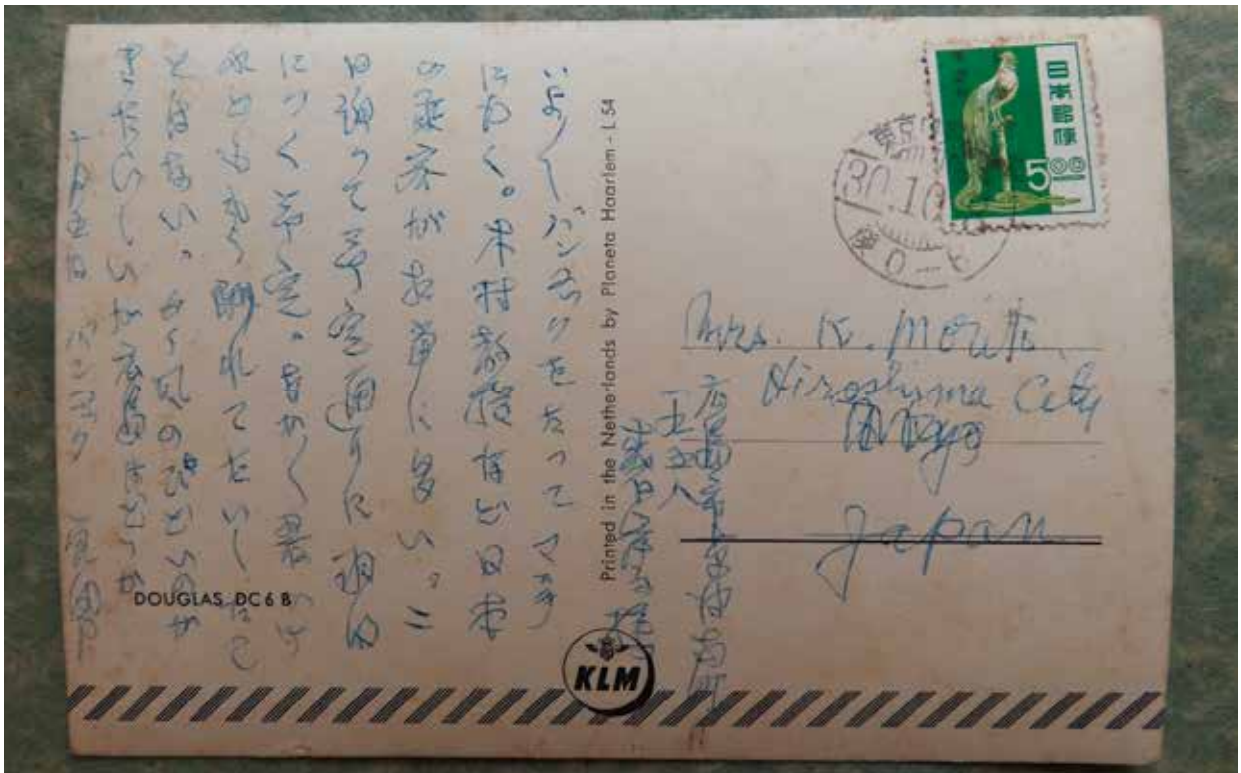
【写真 1 3】 広島大学学時代の森戸辰男 1950 年代、広島県・霞・広島大学医学部正門前、医学部の教授と（左から 2 人目・森戸辰男）後方に元広島陸軍兵器補給廠の建物が見える。



【写真 1 4】 広島大学学長時代の森戸辰男 1950 年代、広島県・東千田・広島大学教育学部（前列中央・森戸辰男、右から 3 人目・皇至道教授）。



【写真15】広島大学学長時代の森戸辰男『平和と教育』についての講演会、1950年代、場所不明。



【写真16】森戸辰男から岸子への国際葉書、1955年、タイ・バンコクから。

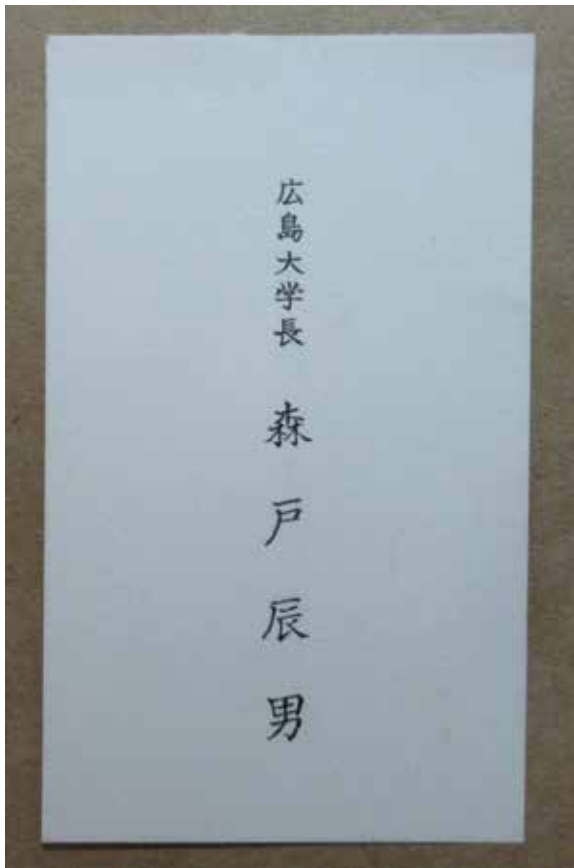


【写真17】広島大学学長時代の森戸辰男、沖縄講演会の行程中 1958年、沖縄県内。（左・森戸辰男、右・屋良朝苗氏）【写真提供・読谷村史編集室】。

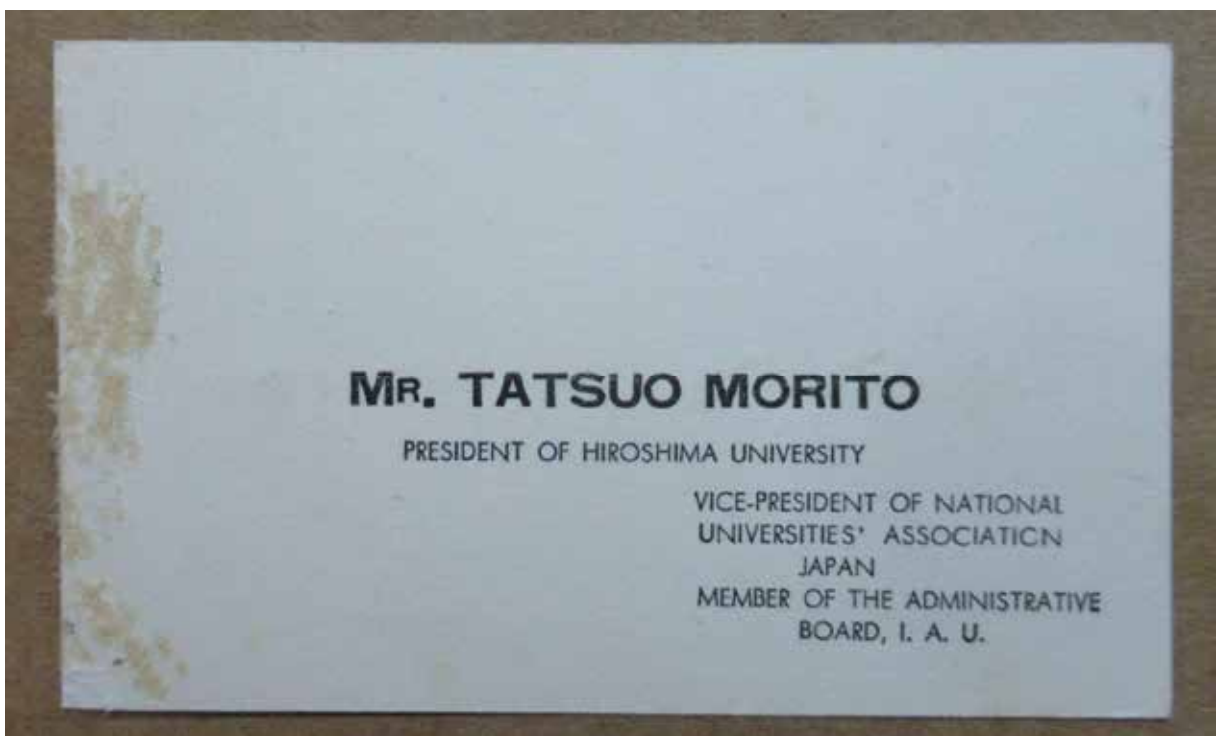
【写真18】広島大学学長時代の森戸辰男、沖縄講演会の行程中、慰霊碑に白菊を献花する森戸辰男 1958年、沖縄県内。【写真提供・読谷村史編集室】。



【写真19】広島大学学長時代の森戸辰男、1960年、百働会福山支部結成記念式典（左・森戸辰男）。



【写真20】広島大学学長時代の森戸辰男の名刺、1950～1963年、表面



【写真21】広島大学学長時代の森戸辰男の名刺、1950～1963年、裏面



【写真22】広島大学学長時代の森戸辰男、二代目豊潮丸の進水式 1959年、山口県・下関・林兼造船（左・森戸辰男、中央・岸子、右・洋子）この進水式では洋子が支綱を斧で切断した、船首の豊潮丸の文字には白布がかかっている状態。

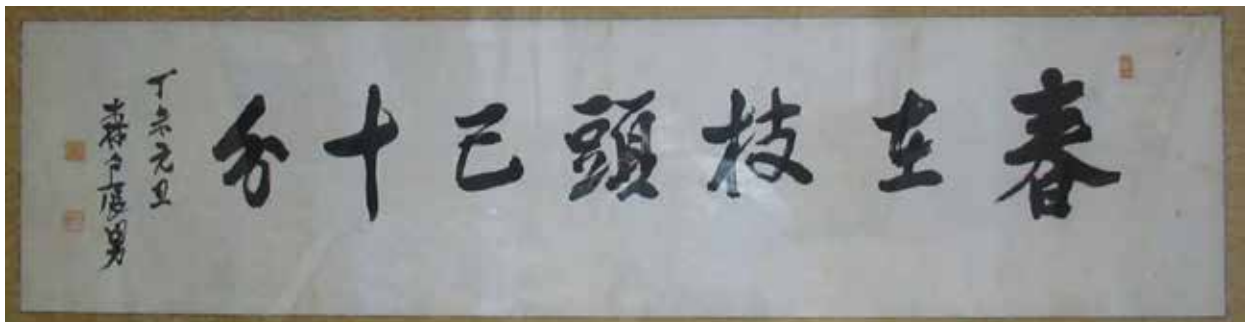


【写真23】二代目豊潮丸の船首部分に記された森戸辰男の揮毫による船名『豊潮丸』。



【写真24】森戸辰男の揮毫『無一物中無尽蔵』、掛軸、1950年代～1960年代。

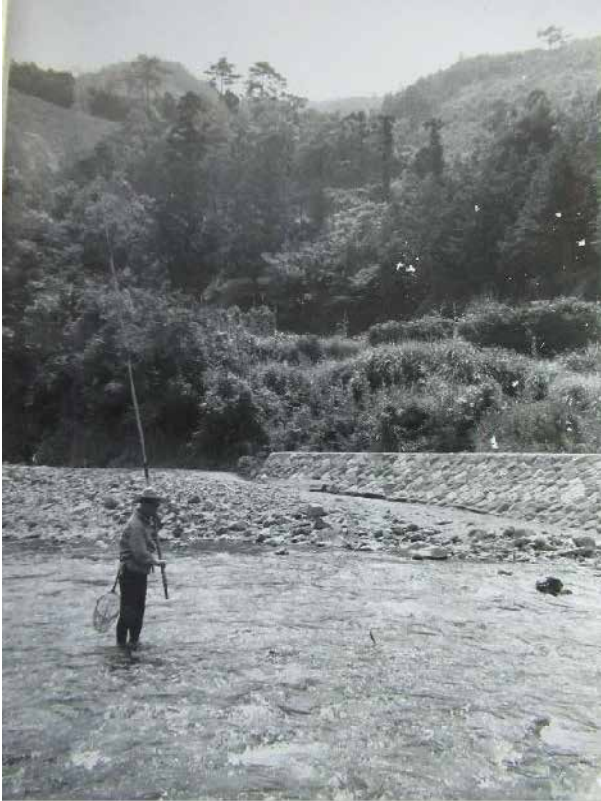
【写真25】広島大学附属高等学校の頃の洋子、広島県・厳島神社 1950年代（左・洋子、中央・泰、右・ショウ）。



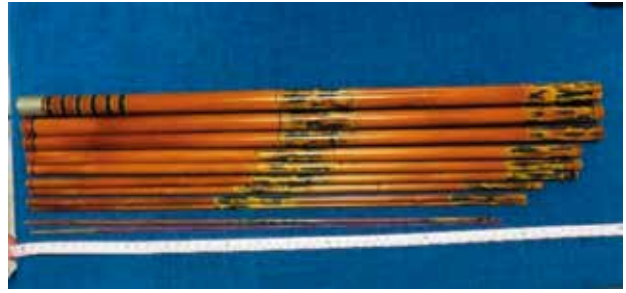
【写真26】森戸辰男の揮毫『春在枝頭已十分』、扁額、1967年



【写真27】【写真28】【写真29】写真26の中の、落款印の拡大画像



【写真30】川釣りをする森戸辰男、撮影年不明、山梨県・道志川



【写真31】森戸辰男愛用の釣り竿



【写真32】海釣りをする森戸辰男、撮影年不明、アメリカ・ロサンゼルス（右から2人目）。



【写真33】森戸辰男の墓参、2018年、東京都白山・蓮華寺（左端・小宮山道夫准教授、左から2人目・本田義央教授、右から2人目・西村博氏、右端・洋子）